

「超真相」宇宙人 1992年 德間書店

深野 一幸 (ふかのかずゆき)

東京工業大学応用物理学科卒。工学博士。

以前から、予言、靈魂、超能力、UFO、宇宙人などの超常現象に興味をもち、独自の研究をつづけ、これらは「宇宙のしくみ」という観点からすべて統一的に説明できることを発見した。

地球が今まま進むとノストラダムスらの予言している「世紀末大破局」は、宇宙のしくみから必ず起こるとして、『199X年地球大破局』を著した。地球大破局を避けるには、宇宙エネルギーを利用する社会を早く作ることだとして、科学技術者の立場から宇宙エネルギーと宇宙のしくみを説く。

月の真相

さて「アポロ計画」では、大がかりな隠蔽工作を行なってなんとか無事「月の真相」を隠すことができた。そしてこのアポロ計画は、まだ完成した宇宙飛行船が10機も準備されていたにもかかわらず、突然17号で中止になってしまった。これは、あまり何度も行くとボロが出やすく、月の真相が明らかになることを恐れたものであろう。それ以後の有人飛行は、地球の周りを回る「スペースシャトル」計画しか行なわれていないこともこれを裏付けている。

アポロ計画の隠蔽工作が首尾よく行ったことから、「影の世界政府」は、地球上に「月は水もなく、空気もなく、生物もまったくない不毛の星」というイメージを植え付けることに成功した。

しかし実際は月はそのような星ではない。では月はどんな星であろうか。次に真相を述べる。

空気がある

月に空気があることは、宇宙飛行士が月面に立てた星条旗がなびいている場面がテレビに映し出されたことが何よりの証拠である。

またNASAの発表している写真の中に、月の大気の存在を証明するものがある。それは、アポロ8号が宇宙空間から月を撮影したカラー写真で、「リム・ブライトニング」という“天体のふちが輝いて見える現象”が月のふち全体に沿って写し出されているものである。この現象は月の回りに大気の層があると考えないとまったく説明がつかない。

さらに、「月面に立っていると、とてもはっきり星々を見ることができた」というアポロ15号のアーウィン飛行士の言葉も月の濃密な大気の存在を裏付けている。

というのは、空気のない真空の宇宙空間では、非常に明るい星を除いて、肉眼ではほとんど星を見ることができないからである。

地球でたくさんの星が輝いて見えるのは、地球を取り巻く大気層が巨大なレンズの働きをしているからである。

ではどの程度の空気があるのだろうか。これに関しては、アダムスキーの情報がある。それによれば、月の気圧は420mb程度だという。地球の4割程度で、かなり低いが、潜水夫が時間をかけて気圧を調整するような調整を行なえば、地球人も宇宙服なしで生きられるという。

水があり植物がある

地球のように豊富ではないが、月にも水がある。空気や水があれば、当然植物がある。

これまでに地球上からの望遠鏡観測で、月面に“もや”や霧や雲が発生していることが何度も観測されているし、アポロの宇宙飛行士が撮った写真にも同様の現象が写っている。

月面上に設置した観測機も、長時間にわたって水蒸気を観測しており、これらはすべて水の存在を証明している。

なお、水は月の表側には少なく、月の裏側のほうが豊富だという。

空気も水もあれば、当然生物の存在が考えられ、植物が存在するはずである。科学者V·A·ファーソフは、長期にわたる月の望遠鏡観測で特定の場所で緑の周期的な変化を測定し、これは植物の生物学的な活動によるものであろうと推定している。

人工構造物があり、基地がある

月面の「静かの海」の近くに8本の尖塔状の人工構造物が長方形の窪地に整然と立っていることが、アメリカと旧ソ連の宇宙探査機による写真の解析の結果明らかになっている。

そのほかにドーム状の人工構造物の存在を宇宙飛行士が報告しているが、決定的な情報は、すでに紹介したアポロ8号のボーマン飛行士が月の裏側から出てきたときの「サンタクロース(宇宙人の基地を意味する暗号)が実在した」という報告である。

さて、以上で月の状況は公式に発表されている情報とかなり異なっていることがおわかりいただけたと思う。

火星の真相は隠されてきた

火星は、地球のすぐ外側を回っている惑星で、大きさは地球の約半分である。地球上近く望遠鏡でよく見えるから、昔から多くの天文研究者が研究している。

火星の全体は赤みがかった見えるが、細かく見るとあまり変化しない暗い部分と、季節によって変化する極冠と呼ばれる白い部分がある。

さらに細かい観測によって、火星にはたくさんのスジ模様があることが発見されている。この模様は季節によって色が変化することから、スジは極冠から水を引く人工の水路(運河)で、模様の変化は植物の消長の変化と対応しているのではないかと考えられた。

このように、地上からの望遠鏡観測によって、火星には生物がいるのではないかと考えられたのである。

しかしアメリカのマリナーやバイキング探査機による調査の結果は、運河の存在を否定し、生物の存在も否定した。

本当は、火星は地球と似たような環境で、植物も動物もさらには人間もいるのであるが、アメリカと旧ソ連の宇宙開発においては、月の場合と同様に、火星に高度に進化した人間がいることを知られないようにするために「火星は生物の住めない、生物のいない星だ」と思わせるようにデータを改ざんして発表してきたのである。

アメリカは先日(1992年9月25日)17年ぶりに「マースオブザーバー」という火星探査機を打ち上げたが、送られてくる情報はやはり改ざんして発表するのではなかろうか。

現在、火星に関して宇宙探査機で得られたデータは次のように発表されている。

「大気は7mb程度で地球の1%以下。主として炭酸ガスからなり、ほかに窒素、アルゴン、酸素、微量の水蒸気(これらを合わせても5%)がある。極冠は大部分ドライアイスからなる。火星の表面温度は氷点下以下である。人工の水路は観測されておらず、バイキング1号で生物反応実験を行ったが見つからなかった」

これらが偽りの発表であることは、ダニエル・ロスさんや水島保男さんらがすでに明らかにしていることである。たとえば、次のような証拠がある。

パラシュートが開いた

アメリカは火星探査機バイキング1号の軟着陸にパラシュートを用いて成功しているが、パラシュートが開くには十分な大気が必要で、7mb程度の希薄な大気圧ではパラシュートは使えないはずである。

火星の空は青い

NASAは、バイキング1号が火星に軟着陸して撮影した火星表面のカラー写真を発表したが、この写真の空の色は青かった。

7mb程度の大気ならば、空はほとんど暗黒に写るはずであるが、空が青いということは地球と同じように十分な空気があることを示している。ただし、NASAはこのことに気づいて、翌日あわててピンク色の空にした写真を修正発表している。

最初の写真の色が真実の色に近いことは、次のことからわかる。すなわち、写真には両方とも色調整のために探査機の足に付けた「標準三原色」と「星条旗」が写っている。この色がどちらも最初の写真が自然で、との写真が不自然なのである。

NASAは、色の不自然さには目をつぶり、火星の大気の存在を隠すためになりふり構わずわざとピンク色の空にした写真を作って修正発表したのである。

濃密な雲がある

火星には高さが15~27kmのオリンパス山という巨大な火山がある。

エベレスト山の2~3倍の高さの山である。NASAはマリナーで撮ったこの山のきれ

いなカラー写真を発表しているが、それには山の頂上を囲んで広範囲に濃密な白い雲が写っている。

このような雲は7mb程度の大気ではできるわけがなく、逆に地球と同程度の大気の存在と水蒸気の存在を明確に示している。

生物反応は肯定的結果だった

NASAはバイキング1号に生物の存在を無人で調べる「生物反応実験装置」を乗せて火星に送り、実際に実験を行なった。

結果は、1つの不明瞭な結果を除いて、生物の存在に対して肯定的な結果が得られている。

生物がいたと発表してもよかったです。しかしNASAは生物の存在を認めていない。

火星の真相はどうなっているか

では、地球人に知らされていない火星の本当の姿はどのようなものだろうか。

まず大気圧は、700~800mb程度と推定されている。水も十分に存在する。気温も地球と変わらない。したがって十分な空気があるからパラシュートを使うことができ、水があるから高い山には白い大きな雲ができるのである。

また極冠はドライアイスではなく、水の凍った氷であり、季節によって大きさが変わるのは、夏は気温が上がって一部が解けて水になるためである。極冠からは人工の水路(運河)が作られていて治水がなされ、その水は農業などに利用されている。

運河はかなり大きく、幅は数10km、長さは数1000kmもあり、これらが幾何学的に交差して作られている。高度な灌漑システムと考えればよい。

植物の存在は地上の観測からも確認されている。すなわち赤道付近の広い地域は、冬は茶褐色であるが、夏になると明るい緑に変化し、さらに暗緑色になる。秋になると黄色になり、冬になると茶褐色になる。これらは地球と同じ季節による色の変化と同じであることから、火星には豊富な植物があると推定されている。

1965年に初めて宇宙探査機マリナー4号が火星の近くを飛び、火星表面の写真を送ってきた。多くの人は、火星表面の運河が写っているのではと期待したが、NASAは運河の存在がわからないような写真を公表し、運河は存在しないと発表した。

しかし、NASAのジェット推進研究所の所長ウィリアム・ピカリング博士は「本當は、マリナー4号は直線状の複数の運河を写真に捉えていた」と数名の親しい同僚に洩らしている。NASAは画像処理をして、運河を消して発表していたのである。

火星の真相を簡単にいえば、地球と同じように空気と水があり、植物や動物がいて、地球人が行けばそのまますぐに住める環境だということである。ただし火星は人間が住める環境であるというだけでなく、驚くべきことに、すでに人間いわゆる火星人が住んでいるということだ。さらに火星人は、以前地球人が想像した「たこ入道」のような生物ではなく、われわれ地球人と同じ人間だということである。しかし、見

かけは地球人と同じでも、文明の発達程度は同じではなく、火星人のほうがはるかに進化しているのである。

金星の公表データは偽りだらけ

宵の明星や明けの明星として親しまれている金星は、地球よりやや小さいが、地球とほぼ同じ大きさの惑星である。地球の内側を廻っているが、いつも厚い雲に覆われているために、内部がどうなっているかはナゾに包まれたままだった。太陽に近いから高温の星だと、金星の雲が太陽光の85%を反射するから、内部は高温ではないなどといわれてきた。

真相は、太陽に近いが温暖な環境の星で高度に進化した人間が住んでいるのであるが、その情報は月や火星と同様に一般地球人にはまったく知らされていないのである。

金星には、アメリカと旧ソ連が合わせて20機以上の宇宙探査機を飛ばして調べている。しかし月や火星の場合と同様に、NASAと旧ソ連は、金星には生物はないと思わせるデータにして公表している。

すなわち、NASAと旧ソ連が共謀して発表している金星のデータは次のようなものである。

「金星の表面は摂氏470°Cの高温で、気圧は90気圧もある。金星大気は大部分炭酸ガスから成る。水は水蒸気として微量大気中に存在するのみである。金星の雲は硫酸からできている。金星は表面温度が高く硫酸の雲があるため、生物はいない」

これは、金星は太陽から近いので熱い星になっているという考え方と、炭酸ガスは温室効果があるので大気を炭酸ガスとすれば高温を説明できるという考え方を、合わせて作られた金星の偽りのデータである。偽りであることは次の点からわかる。

摂氏470°Cの高温ではない

旧ソ連の金星探査機は何機も軟着陸に成功し、金星から写真を送ってきている。

もし摂氏470°Cの高温であれば、積んであるコンピューターのICが働くわけはない。金星の写真を電送してきたということは、ICが正常に働きコンピューターが作動したことを意味しているので、金星の表面温度は高温でないことになる。

90気圧はおかしい

金星は地球とほぼ同じ大きさで重力もほぼ同じと考えられる。また、その星の総大気量は重力に見合った量になっていると考えられる。金星に大気があれば、地球の総大気量と同程度と考えられる。大気圧は温度に比例するから、もし金星の温度が摂氏470°Cとすると、地球が平均気温摂氏20°Cで1気圧とすれば、簡単な計算で金星の大気圧は約2.5気圧になる。金星は開放系であり、もし重力に釣り合わない大量の大気が存在すれば、多

すぎる分が宇宙空間に逃げていき、結局、重力に釣り合った大気しか存在しないはずである。このように考えると、90気圧という気圧は理論的にあり得ないことになる。

硫酸の雲はおかしい

硫酸の雲もおかしい。旧ソ連の金星探査機は、ベネラ7号が初めて金星の軟着陸に成功し、以後ベネラ14号まで金星への軟着陸に成功している。そしてその間、金星表面を写した写真を送ってきてている。その中には金星探査機が写っているものがあるが、探査機はまったくピカピカで硫酸で腐食されたような形跡は認められない。このことからも硫酸の雲は偽りであることがわかる。

大量の水がある

ミシガン大学のトーマス・ドナヒュー博士は、バイオニア・ヴィーナス2号の大気のデータ分析で、水素と重水素の割合から、金星に海が存在しないとデータを説明できないとし、金星には海があるという結論を出している。すなわち、金星には大量の水があるといっているのである。

太陽は熱くない

さて太陽系の各惑星は、太陽からの距離に関係なく生物の住める温暖な環境になっているとすると、現在考えられている太陽熱の伝達機構は間違いであることになる。

現在の科学では、太陽は中心が1500万°Cの超高温の星で、この熱と光が各惑星に届く。そのため、太陽から近いと灼熱の星になり、太陽から遠いと熱と光が届かず極寒の星になる。地球はちょうどよい距離にあるため温暖な環境になっているとしている。

NASAと旧ソ連が発表している惑星探査機の各惑星の環境データは、この理論に沿つたものであるが、これは真相をねじ曲げたデータであることは、すでに明らかにした通りである。

なお、現代科学で考えられている太陽の熱発生機構が絶対に正しいとされているかというと、そうではなく、太陽から来るニュートリノという素粒子の観測データが理論値の1/3しかないことから、太陽の熱発生機構自体に疑問符がつけられているのである。

要するに、現代科学はまだ太陽の熱発生機構と各惑星への熱伝達機構を説明できていないのである。